

教職員を対象とした PCA グループによる 人間関係の変容について

○植野詠土・中西一期・野崎倫日・押江隆
(山口大学教育学部心理学選修)

本研究の目的

現代の教育上の課題は複雑化・多様化しており、「チームとしての学校(文部科学省, 2016)」として教職員の連携や分担が求められる。児童生徒の指導や保護者への対応等で困った際には、教職員同士で相談できる人間関係が構築されていることが望ましい。このような人間関係の醸成を目標に、教職員を対象に PCA グループ(村山, 2014)による研修会を実施した。そこで本研究では、PCA グループのワークを通じた教職員同士の人間関係の変容について検討することを目的とする。

方法

調査協力者 山口県内の特別支援学校に勤務する教職員 37 名が参加した。

調査方法 ワーク実施 1 か月前、実施直後、実施 1 か月後の 3 回にわたり、Google フォーム又は紙媒体での質問紙調査を実施した。

調査項目 属性として性別、年齢、所属、勤務年数を尋ねた。質問項目として①所属学部の教員との関わり(教員同士の会話や連携)についてどう感じていますか②所属学部での教員同士の関係性は相談しやすい雰囲気があると感じていますか③所属学部の居心地について④他学部の教員との関わり(教員同士の会話や連携)についてどう感じていますか⑤他学部との教員同士の関係性は相談しやすい雰囲気があると感じていますか⑥職場の人間関係に満足していますか⑦他学部との交流を持ちたいですか。以上の 7 項目についてそれぞれ 5 段階で評価してもらい回答を求めた。

結果

所属学部(小学部、中学部、高等部、(その他 1 名を除く))と調査時期の 2 要因分散分析を行った。質問②において所属学部の主効果がみられた($F(2,33)=6.56, p=.004$, 偏 $\eta^2=.28$)。調査時期の主効果及び交互作用はみられなかった。多重比較の結果、小学部と高等部で有意な差が見られた($p=.003$) (Figure1)。

また質問③において所属学部の主効果がみられた($F(2,33)=3.33, p=.048$, 偏 $\eta^2=.17$)。調査時期の主効果及び交互作用はみられなかった。多重比較の結果、小学部と高等部で有意な差が見られた($p=.015$) (Figure2)。

考察

本研究では、所属学部の違いによる有意な差はみられたものの、調査時期による差はみられなかった。この要因として質問項目が抽象的であることや現在に関するものであることなどが挙げられる。そのため、質問項目の再検討が必要であると考えられる。また今回の分析には、実施直後に調査協力者に求めた感想の自由記述を考慮できていない。自由記述の中には「チームワークが良くなるきっかけになりそうです。」などの声もあった。このことから、PCA グループのワークにより、より良い人間関係への意識形成につながったと考えられる。今後の課題として、自由記述の内容を踏まえて PCA グループを実施する意義や、教職員の人間関係をより良いものにするための取組について検討していきたい。

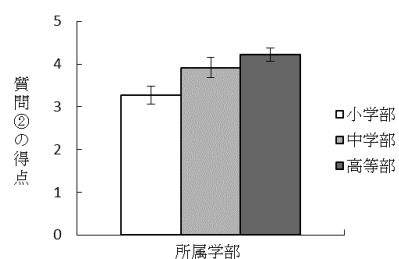


Figure1.所属学部ごとの質問②の得点

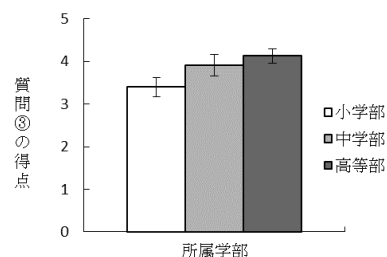


Figure2.所属学部ごとの質問③の得点